

立原正秋全集

第二十四卷

立原正秋全集

立原正秋全集

第二十四卷

角川書店

立原正秋全集 第二十四卷

昭和五十九年八月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三



電話

〇〇三—二三三八—八五二一 営業部
〇三—二三三八—八四五一 編集部

振替東京三—一九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573424-0946(0)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集 第二十四卷 目次

エッセイⅢ

人生

五

雑篇

三五

単行本未収録作品 交喙の嘴

四六

跋文(抄)

四九

書簡(抄)

五一

解題

武田勝彦 五五

年譜

五四

著作目録

五五

参考文献

五七

人 生

イエスとユダについて

一

ぼくがしばしば福音書をひもとくのは、あるいはイエスにかわって聖者になり得たかも知れない一人の生涯に心惹かれてゐるからである。

彼がいなかったら、後世多くの人は神に贖罪する必要もなかったし、イエスも聖者にはなり得なかっただろう。福音書は、はっきりと、彼が悔いてゐると記している。

彼は實際的手腕のある男で、財布を預けられていた。もちろんイエスを愛し、イエスからも愛されていたのである。彼は現世におけるイエスの成功を信じていた一人である。恐らく他の弟子達の誰よりも師を愛し、師の成功を信じてゐたがわなかつた一人だ。賢明な彼は、一流の文化人であると同時にジャーナリストであつたイエスを充分に利用するつもりでいた。しかし彼はイエスを尊敬してゐた。多くの人がイエスを何ひとつ理解してゐなかつたときに、彼だけはイエスを理解してゐた。彼は仲間の十一人をまるで輕蔑してゐた。イエスの予言にふるえあがつてゐる輩など眼中になかつただろう。まったくのはなし、マタイ伝第十章にあるイエスの言葉を彼は胸ときめかせてきいてゐたにち

がない。

福音を伝えるために、弟子達を派遣するにあたりイエスは次の如く命じた。

「天国が近づいたと宣べ伝えよ。病人をいやし、死人をよみがえらせ、らい病人をきよめ、悪霊を追いだせ。ただで受けたのであるから、ただで与えるがよい」

彼ユダはこのとき、俺の天国も近づいてきたと思つたにちがいない。いまにくさるほどのゼニが入るだろう。だが、へ財布の中に金、銀または銭を入れて行くな」とは、師もちとひどいと彼は思う。仲間はずん師の言葉にふるえあがつてゼニを持たずに旅にでるだろう。しかし出納係である俺は、それだけの理由でゼニを持つて出る必要がある。みんなが天国は近づいたと説きまわっているあいだに、俺は女でも買うことにするか、俺は行く先き先きで異つた女と寝ながら、やがてくるであらう天国の夢でもみよう。

「わたしがあなた方をつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである」

師よ、あたりまえのことをいうことはない。俺がおおかみで、行く先き先きには多くの羊が待っていることを俺は知っているし、師もすでに御存じの筈だと彼はつぶやく。

「だから蛇のように賢く、鳩のように素直であれ」とは、いみじき言葉かな。

イエスの次の言葉で、彼はますます師を尊敬するようになる。

「兄弟は兄弟を、父は子を殺すために売り渡し、また子は親にさからつて立ち、彼等を殺させるだろう」

こうも明快な観察を、人間の怖しさを直截に断言できる人、この人の視線こそは、俺の尊敬してやまぬところである。どうして師を愛さずにいられようか。なぜ奴等はふるえているんだ？ とユダは仲間の様子を冷やかに眺める。

師はあたりまえのことを言っているし、それは真実であるのに。

やがてこの一流の文化人の手によつて全てがまるくおさまる世の中、そのときこそ俺の天国だ。愛がどうの、憎しみがどうのと、そんなことは俺の知ったことではない。俺にとつてはゼニが入るのだ。

「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。」

わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者が、その人の敵となるであらう。わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであらう。

このとき十一人の弟子達は、身の毛のよだつような師の視線が、何を意味しているのかと理解に苦しむ。しかしここでも彼は彼なりに師の言葉を受け入れる。たぶん俺は選ばれた者になるだろうとユダはつぶやく。師の言う十字架は、十一人の連中にまかせて、俺は俺にふさわしく十字架など背負わずに師に従えばよい。

心の均衡のとれた合理的な彼は、師の言葉を彼なりに受け入れていたのだ。一流の文化人であるイエスは一面狂人でもあるとユダは考えていた。

そして彼の考えは、ヨルダンをすぎ、ピリポ・カイザリヤへの途上で、ますます固められて行った。

二

彼はゼニのことばかり考えていた。エルサレムについたときにユダはもう、後世にも類例のないすぐれた合理主義者になっていた。イエスは毎日、来るべき受難のことばかり考えていた。死の不安。十字架にのぼる日はあといくらか残っていない。十一人の弟子達は、師の約束にしがみつきながら、しかしいづれも黙々としている。ユダはこの時からすでに別行動にうつりはじめている。それを知っているのはイエスだけだった。並はずれて利口な彼ユダの存在をイエスは他の十一人の弟子と同じく愛していた。イエスは自ら買ってでた十字架にかかるために、謙譲の苦痛に甘んじなければならぬ。イエスは母に会いたいと思った。そんなイエスを冷酷に眺めていたのはユダである。イエスが殉教者であることは間違いない。イエスは深く人間を理解していた。そうでなくてはユダを理解することはできない。イエスは人々の求めに応じて、彼が一流の文化人である負目から、民衆の前で奇蹟を演じなければならなかった。

もちろん奇蹟など起るわけがないから、彼イエスは十字架にかからねばならなかった。

その時分ユダはすでに銀貨三十枚でイエスを政府当局に売り渡しているのである。何よりも政府と手をにぎってなければと彼は考えている。

「彼をあなた方に引き渡せば、いくらくださいますか」

これはもう比類のない立派な精神からでた行動である。このきびしい合理主義者の表情を想像してみるがよい。

聖木曜日になり、イエスはいよいよ受難の準備をはじめ。イエスは、自分を低くして見せようとしながら、十二人の弟子達の足を洗ってやるのだ。ユダがよろこんで足を洗ってもらったのはもちろんだ。彼はペテロのように、師の手で足を洗われることを拒みはしなかった。ヨハネ福音書は、ペテロが、足だけでなく、手も頭も、と要求したと伝えている。たしかにこのペテロの純粋な魂は比肩すべくもない。ユダはさぞペテロをわらっただろう。

生涯の旅路の果ての聖餐会でイエスは「あなた方のうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」

と静かに言い放つ。イエスにとってはまことに厳肅な一瞬である。沈黙。弟子達はめいめい己れの胸に問い、良心を検討し、たまらなくなつて、つぎつぎに質問する。先生、まさか、わたしじゃないでしょう。いや、私は決して先生を売るようなことはありません。そのとき、ユダの声をする。

——先生、まさか、私じゃないでしょう。

ユダの声がふるえていたとは考えられない。このときのユダは、かすり傷さえ受けていなかったのだ。要するにユダは、もう決して助かりっこないイエスとは手をわかちたいのである。せつかくのすばらしい才能を持ち、立派な教養を身につけていながら、政府当局に追われる身となった、自ら事業をぶちこわしたイエスを、彼ユダは、事業がこわれたのは気狂いイエスのせいだと思つてゐる。敗者との連帯責任はまったくごめんこうむりたい。

「見よ、私を裏切る者が近づいてきた」

イエスの言葉に弟子達はびっくりする。なるほど、いつもと変らないユダがやってきた。うしろには、剣と棒をもつた群衆がついている。役人がついてきたことはもちろんである。しかしユダ以外には、弟子達にまじったイエスを

見わけることではない。ユダはキスするという名案を考えている。

へわたしのキスする者がその人だ。その人をつかまえろ

へ先生、いかがですか

このユダのキスはイエスをとまどいさせるに充分である。このてつていした合理主義者にイエスはすくなくからず驚いた。

先生、御機嫌はいかがですか、と言って近づいてきたユダ。たぶんユダは裏切りのよろこびでいっぱいだったろう。それは女にキスするよりも興奮にみちた瞬間だったにちがいない。しかしユダはきわめて冷静だ。

文化人であつたイエスは一面術学者でもあつた。現実を避けさせる言動。つまり十代の青年に禅の無の公案を与える禅坊主や、公案を説こうと努めて参禅するうら若き女性是完全に術学的である。青年は冒険を忘れてゐるし、うら若き女性に男に抱かれてキスすることを忘れてゐる。というよりも無理に逃れようとしている。逃れるくらいなら、女の股倉に逃れた方がましだと彼らは考えないのだろうか。ユダが輕蔑したのはここであつた。

先生、御機嫌はいかがですか。

もっとも傲慢不遜で、しかも自己に眞実な男、もっとも高貴な精神の持主がここに存在している。

ぼくはここまでのユダを高く評価している。しかし絶望したユダの姿ほどあわれなものはない。醜惡そのものである。

イエスがアントニア塔に引かれて行くあいだ、ユダは、自分の裏切りをはつきりと悔いてゐるのである。多くのバイブル講釈者は、ユダがイエスを愛した余りに、ユダが弟子達の誰よりも自分がイエスに愛されていないことを感じたがために、嫉妬から、イエスを売り渡したと説くが、この合理主義者にそんな勝手な解釈は許されない。ユダが最後まで合理主義者になり切れなかつただけにすぎないのだ。なぜなり切れなかつたかは問うまい。ヨハネの頭がイエスの胸によりかかつた瞬間、ユダを支配したのはサタンであるというのは当然でない。ユダがイエスを愛したのは、なによりも、イエスの事物に対する明確な視線であつた筈だ。イエスに愛されていないことは、イエスを裏切る重大な

原因とはならない。だいいち、ユダは、嫉妬するほど仲間の十一人を見ていなかったのだ。まるで軽蔑していたではないか。

ついに悔いて銀貨三十枚を聖所に投げこみ自ら縊れて死んだユダ。

ユダの愚か者奴！ お前のために、血の畑などといういやな名前の墓地があるのをお前は知らないだろう。かつての不屈な高貴な精神はどこへ消え失せたのか。なぜ十字架にかかる師を仰ぎ見なかったのか。まっばだかのあわれな肉体が、粗末な杭にしばらくつけられているのを見ると、お前は歎びでわななく筈ではなかったのか。杭にはTの字形に横木がわたしてあり、手と足はそれぞれ釘で打ちつけられ、とめられている。からだは自身の重みで倒れかかり、頭はだらりと垂れさがっている。血の匂いにひきつけられた犬が足をかじり、禿鷹が舞いおりてくる。拷問のために力のつき果てた受難者は、やけつくようなどの渴きに苦しみ、なにごとかききとれない叫びをあげている。ゴルゴタの地。

これを正視しなかったユダ。十字架上のスタイリストを冷酷に仰ぎ見たとしたら、世の中は変わった筈だ。ユダが首をくくったときに、ひとつの真実が死に絶えたのだ。使徒行伝では、ユダがイエスを売ったゼニで地所を手に入れ、そこへまっさかさまに落ちて、腹がまんなかから引き裂け、はらわたがみな流れでてしまったと記してあるが、瀆神者の犠牲になったかわいそうなユダ。血の畑に花が咲かないとは誰も断言できない。ぼくはあえて、詩篇の言葉にさからいたい。その屋敷はますますさかえ、そこにはたぶんぼく一人が住むだろう。

しかし、鶏が三度鳴いたとき、両手をしばられたイエスが下男共につきけとばされながらでてくるのに出逢ったベテロが、生れてはじめてドラムカン一杯の涙を流したのにくらべれば、ユダはまだまだだ。もしユダが逃げ場を拒否していたらどうなっただろう。裏切りの行為でみちた光輝あるユダの半生は、逃げ場をつくったために、まるで台なしになってしまった。

かつてイエスはピリポ・カイザリヤへの途上、いくどかためらった後に、弟子達に、十字架について語る決心をした。

へだれでも私についてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、私についてきなさい。

これはイエスにとつても他の十一人の弟子達にとつても、仮定ではなかった。ひとりユダだけはそれを信じなかった。十一人の弟子達が一筋の真理を垣間見たとき、ユダは連中を氣狂いだと断定したのである。ユダの不屈な人間精神よ。

また、その翌日、イエスがえらんだ三人の弟子ペテロ、ヨハネ、ヤコブをつれてエルサレムの聖キリルにのぼったとき、イエスは弟子達の目に、まばゆいその姿を見せようとする。それは後日、ヨハネの第一の手紙の冒頭に記されているとおりだ。イエスと三人の弟子がのぼった山は、ナザレから程遠くないところにあつた。イエスがまだ世にあらわれない時代、イエスはよく「父」と二人だけになるためにしばしばこの山をのぼっていた。旅路の果てにイエスは再びこの山を訪れているのである。山へのぼるイエス。粗末な羊の毛の衣を羽織ったみすばらしいユダヤ人が、光を發して輝いている。かつてイエスが海上を歩いて舟に向つて進んだとき、それはヨハネの福音書が伝えるように、三人の弟子達はびっくりした。しかしいまはもう驚かない。三人の弟子にとつてイエスはすでに神そのものであつた。彼等は信じたのである。彼等は礼拝し、愛したのである。

しかしユダはそれを信じない。ユダはめくらではなかつた。

三度その人を知らずといつてイエスを否認したペテロは、鎖につながれたイエスが精魂つき果てた顔を向けたとき、このときのイエスの顔の太陽を思いだし、激しく泣き、ヨハネもまた十字架の足下でそれを思いだす。

しかしユダはまったくそれを信じないのだ。ペテロは激しく泣いたが、ユダは泣かない。一滴の涙も流さない。彼はたぶん自分の合理主義の敗北を感じただけにすぎなかつただろう。

エルサレムへ出發するイエスの心中。彼は二度とは歸つてこないものである。彼はベッサイダの町を呪いの目で眺める。彼等のために捧げた時は流れ去り、自分も再び生きては歸つてこない。彼は敗北感に打ちのめされ、エルサレム

に死に行く。しかしユダはまるでそれに関与しない。彼はイエスの受難が銀三十枚にも値しないと考えているのだ。そのユダが首をつって死んだ。涙こそ見せなかったが、彼はとにかく悔いたのである。

福音書に語られていることは、全く真実である。ぼくには、とうてい考えられないことがあれほど多くあるにもかかわらず、復活したイエスについての記述ほど、ぼくを打つものはない。それは何故か。ぼくをはげしくゆり動かすのはもちろんイエスの受難と復活である。しかし、ユダの裏切りを除いたイエスの存在は認めない。苦悩の底からぼくはイエスを考えるが、しかしその苦悩はユダのものである。

イエスはすぐれた人間革命家であった。イエスが誰のために血を流したかは問う必要はない。ぼくは朝から晩までイエスとユダのことを考える。他の十一人の弟子のことはまるで念頭にない。すぐれた人間革命家のにない手であったイエスとユダの心情がいま惻々としてぼくを打ち、ぼくをゆり動かしている。

四

ぼくがイエスを愛するのは、彼が深く人間を理解していたからである。イエスが神であるとはひどい冒瀆だ。イエスは人である。イエスの愛してやまなかったものを、ぼくは愛する。その人の人間像に対する明快な視線、それはいかえればユダの視線でもあった。ユダの愛してやまなかったものを、ぼくは愛する。イエスにしてもユダにしても、二人の中心問題は常に、自己の運命に直面した人間の責任ということであった。そこで、人間の行為を命じることのできる規範とか、人間を安心させ、慰めを与えることのできる体系はひとつも存在しない。その意味で、後世多くの人が、キリストを、ひとつの確立した秩序とみなしていることには、根本的な誤りがある。人間の責任を、誰かが導くことがあり得るだろうか。人生についての説明や規範を誰かから与えられ、与えられた人はそれをそのまま信じて生きているとしたら、その人は不幸の極みであるといわねばなるまい。

ユダは与えられたものを信じなかった。イエスでさえ信じなかったではないか。信じなかったからこそイエスは形而上学的になり、ユダは首をつったのだ。ここでは首をつった者が不道德で、十字架にかかった者が道德的とされる